

## 今あるものを直して使う姿勢

聞き手—これまでの思い出の業務を教えてください。

上野—平成二五年に開通した横浜市の霞橋です。この橋は明治二九年にイギリスから輸入されたもの



■開通した霞橋

が墨田川に架橋され、昭和四年に当時東洋一といわれた新鶴見操車場に移されました。昭和五九年に新鶴見操車場が廃止となり、平成二一年に橋は撤去されましたが、土木遺産として歴史的価値が高かったため、架替予定であった霞橋で再利用されることになりました。

弊社はこの再生プロジェクトにおいて、再利用の計画・設計・地元を巻き込んだ事業推進を行いました。余談ですが、長大橋が受賞することが多い田中賞ですが、霞橋は橋長約30mと最も短い橋として受賞しました。

聞き手—〇〇年前の構造物を再利用する際の思想を教えてください。

上野—古いものそのまま使うことも大切ですが、次の五〇年・一〇〇年も安全・安心に使用できることが大前提です。そのため、一部を作り直しました。また一〇〇年前の鋼材が本当に使用できるかという心配も



うえの じゅんと  
上野 淳人さん

株式会社 オリエンタルコンサルタンツ  
関東支店 構造部 技師長

あり、鋼材試験も行ないました。これからの時代は、今あるものを直して使う姿勢も大切と考えます。

聞き手—建設コストを考慮すると、新規架橋・再利用は、どちらに利点があるのでしょうか。

上野—現時点では、まだ新規架橋に利点があるのではないでしょう。しかし、今後の技術蓄積によりコスト縮減が進み、これからは直して使うことが多くなると考えます。新規架橋はマニュアルに従って設計できますが、再利用の設計は、現状を診断し、その状況に合わせた設計となるため、高い技術力が必要になります。そのため技術者として、やりがいを感じます。

聞き手—それでは、ここからの建設コンサルタントはどうあるべきでしょうか。

上野—土木業界は経験工学の一面が強いため、既存技術をベースに

展開してきた側面が強く、発注者においても実績重視の姿勢がみられます。しかし、これからの建設コンサルタントは、新技術を積極的に活用したり開発することが大切と考えます。

聞き手—土木業界を目指す学生、若手技術者にアドバイスをお願いします。

上野—「土木が好き」になった気持ちを忘れないでほしい。マニュアルに決められた検討や計算だけでなく、自分が何をつくりたいか、そのために何をしなければならぬか色々と考えてほしい。若いうちの経験が、様々な視点を養うことになると思います。私も公開講座や講習会等に参加しながらまだまだ勉強をして、新たな刺激を得たいと思っています。